

## 学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

平成28年度

学校名	筑波大学附属坂戸高等学校
-----	--------------

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-2	視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の活用	国際バカロレア導入に伴い、校舎改修を実施した。その際、すべてのホームルーム教室ならびに主要な実習室に固定式のプロジェクタ等視聴覚教材を設置した。教職員全員が使用できるように、研究部が中心となって機器の使用法や活用法についての研修を実施した。また、タブレット端末を購入し、教材の配付、提出、情報共有などに有効活用した。
1-2-1	学校の教育課程の編成・実施の考え方についての教職員間の共通理解の状況	国際バカロレア導入の平成30年度入学生から実施する新たな教育課程に向けて、ワーキンググループ、企画運営委員会で検討し、職員会議に提案した。土曜日授業、学校設定科目、IB授業の取り出しなど検討課題が多く、平成30年度の教育課程決定までは至らなかったが、課題は共有できた。引き続き、話し合いを重ねながら新教育課程を検討する。
1-2-3	児童生徒の学習について観点別学習状況の評価や評定などの状況	「総合的学習の時間」「卒業研究」等の科目ではすでに観点別評価を導入し、校内のコンセンサスを取得している。平成28年度は、国際バカロレア導入に関する研修会を定期的に開催し、TQ(知の理論)やEE(課題論文)についてのルーブリック評価の方法について学んだ。観察、応答を通して、生徒の理解度、達成度を把握しながら授業を展開し、評価に役立てた。
1-2-9	教育課程の編成・実施の管理の状況	1年次「産業社会と人間」、「キャリアデザイン」、2年次「T-GAP」、3年次「卒業研究」を通して生徒の興味や関心に応じた展開ができた。特に1年次では、各生徒の興味関心に応じた科目選択を実現することができた。各教科では到達度目標を意識し積極的な学習活動を実現させた。「自由」「自律」「自覚」の教育目標と、生徒個々が価値観を醸成する指導を心がけた。
2-1-5	適切な勤労観・職業観など主体的に進路を選択する能力・態度の育成のための指導(キャリア教育等)の状況	1年次「産業社会と人間」、「キャリアデザイン」、2年次「T-GAP」、3年次「卒業研究」を核としてキャリア教育の充実に努めた。また、各教科や年次に於いてもキャリア教育を意識した授業作りや進路指導を実施した。進路指導部では就業体験、進路相談会、外部機関との連携を通じてキャリア教育の充実に努めた。
3-1-2	問題行動への対処の状況	生徒指導部ならびに人権教育・いじめ防止対策委員会、支援教育委員会、各年次会等の校内組織が附属学校教育局と連携し、対処に努めた。さらには、問題を抱える生徒の指導を考えるケース会議を充実させ、専門機関との連携も通じて各年次ともきめ細やかな指導を行うことができた。素早い対応を行うため、年次会での情報交換、「気になる生徒」の把握にも努めた。
3-2-1	自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導の状況	生徒がより意欲的に自らのキャリアデザインを意識し、行動できるよう、系統的な3年間の学びを充実させた。また、生徒会を中心に体育祭、球技大会、文化祭など生徒主体の行事を通して、自治的精神を涵養した。さらに個人面談や普段からの働きかけにより、自らの意識を高めさせ、積極的な活動ができるように指導した。
4-1-1	児童生徒を対象とする保健(薬物乱用防止、心のケア等を含む)に関する体制整備や指導・相談の実施の状況	スクールカウンセラーの助言と協力、支援教育コーディネーター、養護教員、HR担任との連携により、生徒一人一人に対し、きめ細やかな指導を実施することができた。具体的には1名のカウンセラーは週1回来校、もう1名のカウンセラーは月に2回来校し、相談を希望する生徒に対応している。また、養護教諭も適宜、相談にあっている。いじめ防止対策に関する組織も整備し、学校ホームページにその概要を公開した。
6-1-3	校内委員会の設置、特別支援教育コーディネーターの指名や校内研修の実施等、特別支援教育のための校内支援体制の整備の状況	校内委員会はコーディネータ、教務部主幹、生徒指導部主幹、養護教諭、各年次教員で構成している。コーディネータとは年次会等で定期的な情報の共有に努め、支援のニーズがある生徒をより細かく把握することができた。スクールカウンセラーとも週1回以上情報を共有し、支援体制を強めた。校内研修では、支援教育に対する教員の理解がさらに深まった。
7-1-2	校務分掌や主任制等が適切に機能するなど、学校の明確な運営・責任体制の整備の状況	校務分掌組織図を作成し主幹教諭と主任を各分掌に位置づけ、学校経営方針を示して各分掌の役割と責任を明確にした。各分掌では計画会議において目標と具体的方策を検討して実現をはかり、年度末の評価会議においてその成果をもとに評価を行った。
8-1-2	校内における研修の実施体制の整備状況	校内研修会は研究部が主体となって開催した。平成28年度は課題論文の採点方法について研修したほか、各部署の仕事状況を発表する会を設け、現在の本校が抱える課題、疑問点などについてのディスカッションを行った。3回の研修会で、IBや評価の方法、本校の方向性への理解に努めた。今後、初任者研修を終えた若年層の研修を組織立てて計画していく必要がある。
9-1-6	全教職員が評価に関与しているかなど体制の状況	各分掌が目標を踏まえた計画の策定と評価項目を設定し、年度始めの計画会議に提出した。これに基づき年度末の評価会議において自己評価を提出した。これにより教職員全員が目標と評価を明確に理解し、意識の共有を図ることができた。さらに次年度以降の課題の明確化と達成への効果を高めることにつながった。
14-1-2	大学との連携・協力	大学と連携し、特別講義や各種プログラムを多数開講した。全学規模の教員と連携した「産業社会と人間」特別講義、生物資源学類教員によるファカルティ・ディベロップメント、人間系教員による「心理学入門」、農林技術センターにおける生徒実習、システム情報系教員による特別講義、オリンピック教育プラットフォームと連携したオリンピック・パラリンピック教育、生命環境系教員による野外実習、大学院生による研究授業など、多くの先進的な授業を実践することにより、生徒が専門分野の学習に積極的に取り組んだ。
14-1-3	先導的教育研究	国際バカロレア日本語ディプロマプログラムを導入するため、候補校から認定校へ向けての手続きを進め、2月に認定となった。これに伴い教育課程を変更し、各教科の教育内容を見直した。また、授業時数確保のために年間行事計画を見直した。